

【自由研究発表第1セッション 12月9日 9:45-10:20 A会場 2B411教室】

タイのスーフイズム

カーディリー教団の系譜とネットワーク

柴山 信二郎
(帝京平成大学)

タイのイスラーム社会にはサーイ・カオ(古い潮流)、サーイ・マイ(新しい潮流)の2大潮流が見られるが、これら潮流に加えて、「サーイ・カオでもサーイ・マイでもない」と半ば非難めいて呼ばれることもある「サーイ・スーフイー(スーフイーの潮流)」が存在する。本発表では、タイ中部アユタヤを中心に展開するスーフイー教団カーディリー教団(タイ語で「トリコ(またはトリカッ)・コーディリーヤ」)の2つのグループに焦点を当て、それらの系譜とネットワークについて報告する。本報告は、2022年8月、2023年2月及び同年8-9月に実施した現地調査に加え、先行研究等の二次資料及びタイ語関連WEBサイトからの情報に基づいたタイ中部のカーディリー教団に関する調査・研究の中間報告である。

タイのカーディリー教団を扱った先行研究は、聖者信仰的側面に焦点を当てており、その歴史や広がりについては簡単に触れられてはいるものの、主題として扱われて来なかった。カーディリー教団のアユタヤへの伝播に関しては、伝承に基づき約400年前であると言及されることもあるが、現地カーディリー教団関係者によると100~150年程前にインドからアユタヤにやって来たクルー・ヤーにより伝えられた。その後、クルー・ヤーからト・キーセおよびト・クルー・ソーレの2人の直弟子に継承され、以後それぞれのグループとして展開していった。

ト・キーセ・グループ(タイ語で「カネーン・ト・キーセ」)はト・キーセを最後の導師とする。その系譜は信者達が所持しているとされる教書に記されている。ト・キーセの直弟子たちはアユタヤの他、タイ中部各地に移住し、モスクを中心とした信者コミュニティを形成している。現在の信者はト・キーセから師弟の誓い(バイア)を受けた弟子たちの子孫に血統により継承されている。ト・キーセの聖者廟があるプーカオトーン・モスクでは毎年4回の祭事儀式が開催され、各地にいる信者が参集する機会となっている。これらの機会がト・キーセ・グループのネットワークを維持する機能の一端を担っている。

一方、ト・クルー・ソーレのグループ(タイ語で「カネーン・ワット・コーク」)はワット・コーク・モスクの歴代イマームが導師となっている。導師はコリーファ(カリフ)とも呼ばれ、後継者指名(イザーヤ)により継承されている。その系譜は現導師が所持する系譜図(スィルスィラ)に見て取れ、イラクのカーディリー教団本部から授かった継承者承認証も有している。同グループでは、現在でもバイアにより師弟関係が築かれている。タイ中部の他、東北部コーンケン県にも信者コミュニティがある。毎週金曜日には30~40人程の信者が参加してワット・コーク・モスクの墓地にある先代導師の聖者廟でコーラン読誦や祈願(ドゥアー)、ジクルがおこなわれる。その他にも、ワット・コーク・モスクで催されるカーディリー教団創立者ジラーニー逝去日やラマダーン月27日目の夜に信者が参集する等の機会が信者間の繋がりを維持する機能を担っている。

【自由研究発表第1セッション 12月9日 10:25-11:00 A会場 2B411教室】

現代クルーバーと北タイ村落の社会関係

山田 実季

(京都大学・博士課程)

北タイの伝統には、「クルーバー」(偉大な尊師という意)という尊称をもつ高僧の存在が、人々の宗教実践や社会生活にとって長らく多様な意義を担ってきた。一方で今日においてクルーバーは、ローカルの伝統的実践や言説を超えて全国各地に支持基盤を拡大させ、伝統的クルーバー像を打ち破る新たな展開をみせている。本報告では、その一例として、チェンライ県に寺院をかまえる若手クルーバーをとりあげ、新しいクルーバーの登場が既存の村落社会にどのような経験をもたらしているのかについて検討する。

伝統的なクルーバー像として筆頭にあげられるのは、北タイ髓一の高僧として今なお人々に記憶されるクルーバー・シーウィチャイ(1878-1939)である。この高僧の名声を象徴づけた出来事の背景には、19世紀末から20世紀初頭にかけて推進された、中央(シヤム)による近代国家統一事業がある。この一環として制定された1902年のサンガ統治法は、それ以前まで地域の多様な慣習に従ってきた僧侶たちの仏教実践を国家の管理下に一元化させるものであった。これに抵抗を示したのが、クルーバー・シーウィチャイである。クルーバー・シーウィチャイに代表されるように、あるいは同師の系譜を継ぐ著名なクルーバーの活躍にみられるように、クルーバーをめぐる議論はしばしば、伝統と近代、周縁と国家の対立軸が念頭におかれ、ここには人々が希求する千年王国主義や地域的伝統に根ざした宗教復興を主導するクルーバー像が引きだされる。しかし、本報告が指摘するのはむしろ、新たなクルーバーが現代の多様な社会・経済の変容に応じた独自性を遂げるなかでもたらした、既存の村落社会とのさまざまな軋轢や葛藤である。

本報告が対象とするチェンライ県の若手クルーバーAは、「クルーバー」の名を若くして獲得し、かの伝説的高僧クルーバー・シーウィチャイの生まれ変わりであるとししばしば噂される。このクルーバーは、国や地域を越えた多様な信者層から多額の布施金を得て、自らの寺院施設を発展させるのみならず、村落社会の医療や教育、他寺院の修繕・増築事業に対する多額の寄付をもおこなっている。クルーバーAを支持する評価としてもっぱら聞かれる定型句は、「クルーバーはすべてをあたえる」という語り口である。一方で、村落社会においてひととき目立つクルーバーAの人気は、土着の師弟関係や近隣の僧侶とのあいだに、布施金をめぐる鋭い対立や緊張関係を引き起こした。このことは、村落がのぞむ僧侶像やクルーバー像との溝を浮きぼりにさせた。このように、都市信者層の熱狂の裏で、村落の人々がこの人気僧にみてとるのは、脈々とつづいてきた寺院と村落のあいだの制度化された社会・経済関係から逸脱したクルーバーの姿でもあった。地方村落における新しいクルーバーの登場は、かつての近代化の過程で北タイの人々が経験したような伝統と近代、地方と中央の対立構造をめぐる新たな局面をもたらしたと思われる。

【自由研究発表第1セッション 12月9日 11:05-11:40 A会場 2B411教室】

タイ国 カトリック信徒共同体を中心とした「知」の形成についての考察
チェンマイ県、ジョムトーン郡、メーポーン村における宗教/日常実践を事例に

木戸 七彩
(京都大学・博士課程)

本発表はタイ国においてカトリック教会に属するカレン族（以下、カトリック・カレン）と「知」の形成について考察する。本発表で取り扱う「知」について、具体的には「共同体文化論（*Watthanatham Chumchon*）」と、その思想的流れを汲みつつ発展した「パーチュムチョン運動」（森林保護、資源の利活用に関する運動）、これら一連の思想的潮流を指す。本発表では報告者の調査地であるカトリック・カレン信徒共同体における宗教/日常実践を事例として、その「知」の形成要因について考察する。カトリックの教えの変化に関する外的ファクターと、村落共同体に浸透しつつあった資本主義への危機感という内的ファクターによって発生を見た「共同体文化論（*Watthanatham Chumchon*）」[チャティップ 1992]は、タイ国国内ではニポット神父を主体として、その流れに乗った医者、知識人、NGO職員を担い手として発達し、やがてタイ山地住民や平地タイ人を巻き込む「パーチュムチョン運動」に展開する。仏教国タイにおいて、国外の宗教的取り決めが国内の信徒共同体に及び、やがて多様な属性を有する人々を巻き込んで展開するという点で重要な思想的潮流であるが、先行研究はそのアナーキズム的なイデオロギー性に主眼が置かれ、一連の「知」の形成の因果関係に関する蓄積は未だ少ないように思われる。

本研究では以上のような「知」の形成の因果関係を、チェンマイ県ジョムトーン郡メーポーン村のカトリック・カレンの宗教者と信者の語りと日常/宗教実践の参与観察の分析結果から考察する。2022年8月1日～10月20日（及び11月1日～5日）にかけて実施した現地調査から明らかとなったのは、①宗教者、村内外の信者、タイ人教師、カレン人子弟、その保護者、NGO職員や外部の支援者というアクターたちが、信仰と教育を両輪とした信徒共同体とそのネットワークを構築していること、②その中でもメーポーン村の宗教者や信者はときおり、（タイ語のコミュニケーションでは）「コミュニティ（*chumchon*）」や「家族（*khrop khrua*）」という言葉で同胞意識を表現するが、この用語は道徳的価値や理念を含み、統一的なカトリックやカレン人としてのアイデンティティを示唆する、ということである。

以上の分析より、1) メーポーン村の人々による宗教/日常実践が、キリスト教の教え・思想、信徒としての統一的なアイデンティティやカレン性と重なりつつ、2) そのような宗教/日常実践の場である信徒共同体が、複数社会とアクターとの共存を図る場として機能し存在すると指摘する。「共同体文化論」から「パーチュムチョン運動」に至る思想的潮流の「知」の形成要因は、まさにこのようなカトリック信徒共同体における実践の在り方と、複数社会の交差点となりえる場に求められるのではないだろうか。

参考文献

チャティップ・ナーストパー.1992.「タイにおける共同体文化論の潮流」『国立民族学博物館研究報告』17巻3号：523-558.